

令和7年10月28日

中標津町議会議長 後藤一男様

中標津町議会議員 高橋善貞

研修報告書

以下の視察について、次のとおり報告します。

- 1 観察名 文教厚生常任委員会道内視察
- 2 観察先 北見市立西小学校（北見市教育委員会）
- 3 観察日 令和7年10月8日（水）
- 4 観察事項 ICT教育の取り組み及びGIGAスクールについて
- 5 成果

事前に議会事務局から提供された、令和2年12月策定の「北見市ICT教育の手引き」を読んで、どうしても納得できなかったのは、なぜこんなに早くGIGAスクール実現の情報が入手できたかでした。

安倍元総理がコロナ禍でこの事業を前倒したのが令和2年度の年末であり、中標津町は混乱し一人一台のタブレット、周辺機器整備、サポート体制の構築で補正予算を組むのが精一杯だったのを記憶しています。

中標津町では具体的な「年次計画」「手引き」を作成する余裕が無かった中で、北見市が一早くITCへの実現ができた大きな違いは、文部科学省の「2018年以降の学校におけるITC環境方針」を行政と教育委員会が前向きに検討してきたからでした。

躊躇なくchromeBookの選択とロイロノートの活用が図られ、パソコンキーボードのタイピングコンテストに参加など、GIGAスクールへの取り組みが行政・教育委員会・学校・教職員・児童生徒・家庭に浸透しており、現在はchromeBookの全員持ち帰りを推奨しているとのことで、中標津町の「許可さえ得れば家庭へ持ち帰りができます」という学校教育のみで家庭学習への活用を目指していないchromeBook（機器）の活用にブレーキをかける考え方には「更に先進自治体（学校）と差ができてしまう」と感じました。

令和7年度に全国的に児童生徒一人一台タブレット端末の更新時期（耐用年数）が始まり、これから始まる「セカンドGIGA」に大きな期待をしていますが、中標津町の旧態依然の考え方で「タブレットは高価な端末」の機器の扱い方、全国的なGIGAスクール展開に対し「地元企業1社に依存」するGIGAスクール運営支援センターなど根本的に改善し

ていかなければならぬ事が多々あると感じました。

特別に授業参観させていただきましたが、児童のタイピングの速さに驚きました。

文教厚生常任委員会の学校視察は猛暑により中止になりましたが、今後ぜひ中標津町のGIGAスクール（タブレット端末を使用した授業）を参観してみたいと思います。



授業を見学させていただきました

2 観察先 大雪かみかわヌクモ（上川町）

3 観察日 令和7年10月9日(木)

4 観察事項 未来型公民館について

5 成果

既成観念にとらわれない施設、地元住民と観光客とが一緒に活用する児童館はイメージできないので、一体どれだけの施設整備費をかけて建設したのか興味がありましたが、「ヌクモ」の施設は閉校した学校の体育館をリニューアルしたものでした。



施設内の様子

高さの無い仕切り越しに子どもたちの遊ぶのを親達は見ながらコーヒーが飲めるカフェ方式のテーブルが3組あり、テーブルには上からプロジェクションマッピングが投影され子どもも大人も楽しめるように配慮されています。

また、プロジェクションマッピングを活用したプレイルームでは、子どもたちが描いた自分の絵がアバターとして画像に入り込める仕掛けが人気で、ここでは子どもたちが簡単なタブレット端末で画像を操作できるシステムを導入していますが、端末操作方法に何ら違和感が無くプロジェクションマッピングに入り込んでいくそうです。

施設全体のデザインとプロジェクションマッピングは東京都のプログラミング企業「チームラボ」が担当し、最前線のシステム・プログラムを「ヌクモ」に提供・運営協力を続けております。元協力隊員だった地元出身の施設長の情熱的な説明が印象的でした。

上川町を視察して、都会より地方の小規模自治体には行政職員も民間人も熱量のある人達がまちづくりに参加していると感じました。

特に上川町の行政職員・議會議員に対して「感動人口1億人！」のキャッチフレーズを真剣にアピールし、施設管理者の「合同会社たけっちょラボ」代表者である松井丈夫氏の

行政・議会を動かす力に感動しました。

また、質問に上げた「上川町には道の駅が無いのですが、ヌクモは道の駅と併設を考えなかったのですか？」には、民間観光施設「北の森ガーデン」との競合もあり、コロナ禍前に議論は加速したのですが企業推進の立場から再考となっています。

2 観察先 富良野市役所・リサイクルセンター

3 観察日 令和7年10月9日（木）

4 観察事項 ごみ資源化の取り組みについて

5 成果

中標津町は根室管内4町で組織する根室北部廃棄物処理広域連合に加盟し、別海町が運営するごみ焼却施設に年間ごみ総搬入量約1万2千トンの約57%に当たる6千7百トンを搬入し、令和6年度で4億9千万円の負担金を支払っています。

施設老朽化の為、本年度基本構想を行い令和10年度に工事着工を目指していますが、中標津町独自にゴミ減量化を推進する方法として「堆肥化施設」「固形燃料化施設」の検討も必要と考え、「分ければ資源・混ぜればゴミ」でリサイクルは北海道トップレベルである富良野市を視察研修することとしました。

また、7月5日掲載の北海道新聞記事で紙おむつを「富良野市117tを再利用処理」を見て固形燃料化への課題や住民対応について質問したところ、かなりの時間をかけて何度も丁寧に地域住民に対し説明会を開催してきた事を強調しておりました。

過去にごみ焼却場廃止に至るまで行政職員が住民対応してきた長い歴史と実績、古い農村地帯であり地域と行政の信頼関係が構築されていることに中標津町との違いを感じました。

中標津町とさほど変わらない人口19,290人（R3/3/31）の富良野市には年間200万人近い観光客が訪れるそうですが、民間企業・宿泊施設からのごみ分別回収を市民と一体となって取り組む姿勢は見習うべきだと思います。

ごみ分別のパンフレットや資源回収カレンダーは、ホームページやごみ分別アプリ「ごみナビ」だけではなく、戸別に紙媒体で定期的に配布されていることや、リサイクルセンターでは廃棄された衣服やバックなどを洗浄し平成22年から「リサイクルマーケット」により一着100円（現在）で市民に提供しています。

市民がリサイクル行政を身近に感じるようアピールする素晴らしい取り組みであり中標津町も検討すべきと思いました。



富良野市役所にて



リサイクルセンターでの説明

プリンスホテルと北の峰スキー場、テレビドラマ「北の国から」、富田ファームのラベンダーなどの観光施設が多い中で、最近問題となっている「オーバーツーリズム」も視野に入れ、ごみ減量化計画により「消費者、販売店舗等の理解と協力体制を整え、レジ袋、トレー等包装資材を減らす運動を展開する」との目標に、改めて富良野市の環境行政の力強さを感じました。

2 観察先 置戸町役場

3 観察日 令和7年10月10日（金）

4 観察事項 子ども・子育て支援について

5 成果

昭和30年人口12,671人をピークに、平成2年に5,000人を割り現在2,543人（R6/12/31）で約5分の1になったが社会福祉のまちとして置戸高校には道立高校では道内で唯一福祉科が配置されています。

また、林業が盛んな町の歴史があり地域ブランドとしての「オケクラフト」は有名で、木工美術品などは洗練されたデザイナーの手で加工から販売まで行っており、地元産の木材加工は作り手が育成され次世代へつなげています。

現在建設中の児童館は「中標津町の『みらい』を視察し参考とした」との事で設計コンセプトや配置が「みらい」に似ています。

現在、置戸町児童センターが小学校1年生から小学校6年生までを対象に「留守家庭児童」対象事業を行ってきましたが、完成後は町内全ての子どもたち（0歳から18歳）を対象とした「自由来館児童館」として、特に中高生の居場所となる事を期待しているとの事でした。

最も注目したのは「置戸町小中一貫教育『ふるさと教育』（おかげと学）構想」で、小1～小2を「基礎期」、小3～小4を「定着期」、小5～中1を「充実期」、中1～中3を「発展期」と位置付け、9年間様々な「置戸町の基礎」「置戸町ならではの文化」を学びふるさと教育を充実させ町への定着を置戸町全体で推進しています。

町中には「置戸高校に進学しよう！」と書かれたのぼり旗が要所要所に掲げられております。

中標津町の「町内会に入会しよう！」と書かれたのぼり旗と対比してしまうのは、町内会入会率32%の町と、ふるさと教育を地域ぐるみで推進する置戸町の大きな差と思いました。

行政職員もこの趣旨を理解し、企画関係職員・教育委員会職員・福祉関係職員などが連携して意見交換を行い新設児童館事業が進められている姿が印象的でした。

役場庁舎以外の建物や施設はとても立派で、特に有名な暖炉のある図書館の説明では、1965年農業予算で「農村モデル図書館」を開設してから、2005年「生涯学習情報センター」として建設、2015年に図書館法による図書館に至るまで、国会議員の力を借りて過疎債の活用等可能にしたとのことでした。



図書館に設置されている暖炉

視察研修を対応していただいた職員の皆さんととても積極的に説明され「何でも聞いてください」の姿勢は好感を持ちました。

視察研修を終えてからパンフレットを見て、「置戸町勝山温泉ゆうゆ」「置戸町勝山温泉ゆうゆコテージ」には個人的に行きたいと思います。